

マリガヤハウスでのインターンを終えて 加波 拓真

こんにちは。昨年の夏にフィリピンのマリガヤハウスでお世話になった大阪市立大学の加波拓真です。今回はマリガヤハウスでお世話になる中で学んだことを書かせていただきます。私が学んだことは実際にやってみることの大切さと、当事者意識の欠如2つです。

前者についてお話します。私はフィリピンに行く前、将来国連などで人権にかかわる仕事をしたいと漠然と考えていました。しかし、実際に国際系のNGOなどで働くとはどういうことかわからなかったこともあり、それなら一度体験してみよう、という軽い気持ちでインターンに参加しました。私は日常英会話くらいならできると思っていましたし、法学部であるということもあってマリガヤハウスの業務も十分こなせると楽観的に考えていました。しかし現実はいちど思い描いていたものとはかけ離れていました。まず、一番自信のあった自分の法律知識が実務では全く役に立たないことを学びました。さらに英語訳もうまくできず、結局別のインターンにチェックをお願いするなど、私は翻訳作業について全くマリガヤハウスの役に立てませんでした。また、インターンの中盤から私たちが始めたファンドレイジングについても、私はなににもすることができませんでした。このインターンを通じて自分が学んだことの一つ目はいかに自分が「井の中の蛙」であったかということです。もし夏にマリガヤハウスに行かなければ自分は今でも中身の無い自信を持ち続けていたかもしれません。

次に、後者についてですが、昨年の夏は阿蘇山の噴火、茨城県の洪水や安保法案可決など日本で様々な事件がありました。しかし私は日本国内にいなかったため、日本で何が起きているのかなかなかリアルタイムで知ることができず、毎朝オフィスで欠かさずニュースをチェックしていました。しかし日本にいる間私はこれほど国内ニュースに敏感ではありませんでした。なぜなら日本国内にいるときは家族や友人との会話、新聞などでニュースを比較的早く入手できたからです。しかし、フィリピンにいる間は例えば東京のほうで大きな洪水があったというニュースは入ってきますが、もし友人が罹災したとしても何もできません。そういうもどかしさを感じながらニュースをみていました。これは自分が日本人であり、日本人としての当事者意識があるからこそ生じた感情、行動だと思えます。すなわち、国内で今発生している事件は直接自分の生活に関わっている、または関わることになると思ったからこそ特に関心を寄せていたのだと思えます。逆に日本に帰ってきてからはフィリピンのニュースに注目するようになりました。それは自分がお世話になった方々やJFCたちに直接関わる事だと思うからです。しかし、私の友人の多くはフィリピンやその他海外についての関心が少ない人が多いです。それは自分とは関係のない遠い国の話だと思っているからだと思います。振り返ってみれば、自分も心のどこかでシリア難民のニュースなどを聞くたびになんとなく遠い国の話だと思っていたような気がします。これからの時代いかに多くの事柄について当事者意識をもって、自分のこととして関わっていくことができるかが大切である、ということを実際にマリガヤハウスでのインターン期間を通じて学ぶことができました。

以上のマリガヤハウスでの体験は私の人生を変えました。JFCのために自分が何もできなかったくやしさを、そしてJFCに実際に会って、彼らの問題があくまでどこか遠い世界の話ではなく自分の日常と深いつながりがあることを知ったことで、インターン後も彼らのために何かしたいと思い、弁護士となって再び彼らと関わりたいと思うようになったからです。

